

弩

真

ん

中

を

知

る

④

三月十三日（午後）

児玉

雨子

先の東日本大震災をテーマに、都市や同じ国に住みながらも生じた「痛み
のギャップ」そのものを描き、私なりに何か伝えられたらと思います、この作品
を掲載することに至りました。

あくまで作品中での世界ですが、読んでいただく方の中には、不快に感じ
られるであろう表現があるかと思えます。特別な思想や意見ということでは
ありません。一家の表現の方法のひとつと、なにとぞ作品のご理解をよろ
しくお願い申し上げます。

私はそんなやつらとは違うようにいよう。

まっすぐ流されず、いつも通り、いつも通りに元通りの私でいなくちゃ。役に立たない情なんかで涙するくらいなら、まだ普通に勉強して美味しい物食って寝るこの春休みならではのルーティーンを崩さないでしっかりとこなさなくちゃ。私がこれをやらないと、世の中が二十四時間テレビになっちゃうぞ。

私はちよつと考えて、とりあえず冷蔵庫の中の麦茶のペットボトルを口飲みして、戸棚にお菓子がなか覗いてみた。なかつた。なのでそのまま氷みたいなフローリングを裸足で歩いて、自分の部屋に戻った。携帯を充電器に差し戻して、電気毛布の効いたベッドの中にうづくまる。窓の色が少し青くなってきた。冬の夜明けはそんな、太陽がぴっかーんと触覚を伸ばしてさんと昇ってくるわけじゃない。空のトーンを上げて気付いたら昼を連れてくる。昼夜逆転しないように、眠れなくても携帯をいじらないで目をつぶる。目をつぶっても瞼に残るブルーライトの光を見ないように、もっとベッドの真ん中まで潜って、雀の鳴き声も届かないところに逃げてちゃんとした、正しい三月十三日に起きるために。

私にとっての十三日は昼の十二時から始まった。リビングの食卓でお母さんがテレビの、寝る前の昨日とは全く変わらない画面を、真剣に眉をしかめて見ていた。朝よりもリビングがもわんとサウナのように蒸して暖かかった。ベランダのそばにある加湿器がしゅわしゅわと白い蒸気を吐きだしていた。

「大丈夫だったんだ」

あー！だめだめだめこれじゃあ昨日誓ったことさっそく破ってる！こ
うゆうときは何事もなかったかのように「お腹すいたあ」とか言うべきなの
私は、私だけは！

「凜ちゃあん、すぐく心配したのに家帰ったら部屋で爆睡してるしさあ。み
てこれ、これ全部家だったんだよ、もうひどいよひどい。みんな住むところ
無くなっちゃってるんだよ。津波の映像なんて見た？あたし足震えちゃった」

お母さんが少し鼻をすすって、薄いテレビの背中を掴んで私の方に向けた。
相も変わらず瓦礫の山。船がコンクリートのビルに突っ込んでるし、なんか
本物っぽくないけどこれが実際のことだ。でもなんて答えればいいのか、正
直可哀そうだよなーとか出てきそうなのを抑える。

「うん、ってかお腹減ったんだけどなんかない？」

ちよつとこれじゃあやりすぎかなって思ったけど、そうでもしなきゃだめ
だ。可哀そうとか言うほうが、テレビの中に失礼だと思ったから。

「なーんもない！」

両手を広げて、お母さんがまた一つ鼻をくすんと鳴らして笑った。

「はあー？どっか食べにいかないかなあ」

「帰りに炭酸買ってきて！あとなんかポテチ系のしょっぱいやつね」

泣いていたのかただ花粉症なのかわかんないけど、鼻だけ鳴らして無理し
ているようには感じなかった。娘が普通の会話をするから合わせてあげるわ
みたいなのじゃなくて、ただ鼻水が出るだけで他はほんっとーにいつも通り
だった。ああきつと、みんなだつてそうだ。みんなだつてこうして建前は可

哀そうとか言ってメロンソーダ飲んでるに違いないよ。

「はい」

とりあえずもう一回自分の部屋に戻って、何にも出かける用事がないからとりあえず勉強道具を取り出して、いつものピンクのジャンスポーツのリュックに詰める。ジャンスポのリュックは、テキストだけを入れるといい感じの形に収まる。筆箱の配置までしっかり整えて、程よいかっこいいぺちゃんこ具合を作る。

タンスから黒いタイツとダメージのショールパンを引きずり出して、まだ畳んだままで仕舞ってなかった洋服の山からザラのベージュのニットを出した。下に着るものは別に見られないから、ヒートテックと適当な胸が開いてるデザインラグランをベッドの上に並べる。下着の棚からブラを出して、前で留めてからくるつと回してカップを合わせる。少し屈むとカップから乳首が見えてしまう。前まではあんまり気にならなかったしむしろこれがいいって思ってたけど、貧乳って結構寂しいものだ。おっぱいがブラからはみ出るんじゃないくて隙間ができることが、だんだんと名誉じゃなくなってくる。貧相な体が痩せててかっこいいっていうのはもう高校二年を超えると通じなくなる。やっぱりなんだかんだ言っておっぱい欲しいよ大好きだよ女でも。

そして並べた服を順番に身につけていって、コンタクトをいれてから、学校のカバンからポーチを出して洗面台に持って行って、薄くアイシャドウで瞼にグラデーションをつけて、睫毛にマスカラを塗る。私はアイラインをそこまではっきり塗らないし、勉強するだけだったらこれでいい。むしろ目が疲れてきたり目薬を差して、変に目の周りが汚れるくらいならあんまり手の込んでないこっちの私の方がかわいいから。髪の毛を軽く梳かしてつんつん立ってるあほ毛にまとまるミストをかけて抑える。ミストの甘いベリーの香りで、昨日食べたタルトを思い出す。何度食べたって食べたくなる。

リビングに私服用のコートを取りに行くと、お母さんはテレビをつけっぱ

なしにして小さいノートパソコンを眺めていた。

「あつ凜ちゃん、このブーツ安いんだけどどうかな」

「えっ、それアグーじゃん」

「このサイトだと安く買えるんだよ。ほら見て定価二万五千円が八千円。凜ちゃん欲しい？」

「欲しいけどサイズ全部ないんですけど」

「あっじゃあだめだね。これ残り少ないから早い者勝ち。あつ炭酸とポテチ買ってきてね」

食卓に置きっぱなしのリップクリームを塗って、コート掛けにある短い丈のコートを着た。二度手間三度手間だけどまた部屋に戻ってポーチをつめなおしたリュックと、コンセントごとぶっこ抜いた携帯を持って家を出た。ぐしゃりと鍵が閉められる音が、聴こえてこなかった。

菊名の駅の階段は、いつもバスを待つ列が改札の手前まで伸びている。この立地はいつもどうにかならないのかと思う。菊名は狭いところにやたら物が縦に縦に押し込まれている気がする。もし今ここでまた大きな地震があったら、最後尾にいるおじいちゃんがよろけてその前の制服の女の子にのしかかってそしてまた前のおばあちゃん二人と主婦っぽい若い女の人となんかまたおばあちゃんとオバチャンと小学生と、やっとならりマンのおっさんがいたんだけどこうやってドミノ倒しになって大事故になっちゃうよね。そんで一番前の、またオバチャンなんか道路につんのめってやってきたバスに下敷きになっちゃったりして：うわグロいえぐいえぐい。昔なんかの漫画で車に轢かれて顔が潰れて誰かわかりませんみたいな台詞があつてちよーきもかったんだけどそれ全くありえないことじゃないよね。だって改札通って、元町・中華街行の電車を待ったとして、そこでまた地震が起きてちよーどよく電車来て轢かれたらどうすんの。これも漫画で読んだけど、電車の人身事故の死体を拾うバイトがあるって知ったんだけど、拾うだけのバイトってこ

とは駅員さんがひよいひよいって持ち上げられないくらいヤバイやつでしょ。もうばらばらに原型留めてないんでしょ。あとね、現代文の授業で先生が教えてくれたんだけど、ニュースで『頭を強く打って死亡』って本当は頭だったのかよくわかんないくらい粉みじんになったってことだって。人間なんて簡単に死ぬるんだよ。すばーんと細胞の塊になっちゃうんだよ、もう勝つことなんてできない自然のパワーと、文明の力に変な飲み込まれ方をしたらガラスよりもえげつなく壊れることができる。絶対死にたくない。そんな死に方はしたくない。やっぱり死ぬなら気付いてない間に痛くてつらい思いひとつしないままスツときれいに死にたいじゃん、死にたくないけど。一番幸せなのは、死んだときにニュースに取り沙汰されない死に方なんだってホント。

黄色い線の凸凹に触れるつま先が震える。一分一秒先、いつすばーんとむごい死に方をするのかもわからない。そんな、当たり前すぎることを思い出して家に帰りたくなかった。炭酸とかどーでもよくない？水分摂れてるだけ幸せじゃない？でも死ぬかもしれないとか考えないと、メロンソーダ飲みたいなあとかリュックの形はこれがかっこいいとかあー野島と横浜でばったり会ったりしないかなーとか、やっぱりそっちばっか意識行っちゃうよ。別にね、だからそんな死に方した人可哀そう日本のメディアは政治はみんな狂ってるとか、そうじゃない、そうゆうことを言いたいわけじゃなくて、要は、怖いけど怖いから考えたくないの。生きてることがもう一番幸せ神様仏様みんなマジありがと大好きってのじゃなくてね、生きてるのなんて当たり前じゃん今生きてるんだから。ねえ誰だっけ、夏目漱石だっけ？ちがうちがう、やっぱい誰だっけこの前論説文で読んだんだけど、『人間は死んだら一番人間らしくなる』みたいなの：動物は動いてこそ動物だけど、人間は死んだらやっと完成するみたいなの。あれ絶対ちがうと思う。いや、夏目漱石か誰か忘れたけど、その人は同意なんて求めてないだろうことは分かっちゃいるんだけどね、私はそれに同意できない。死んだらもう人間じゃなくて骨と肉だよ。やだ中

二病みたいだ『骨と肉』とか…。それが正しいなら、私一生人間じゃなくていいし。死にたくないし、百歩譲って死ぬなら超極楽安楽死がいいしお腹いっぱいベリータルト食べてメロンソーダ一口飲んで一番かわいく見える化粧してその時一番着たい服を着て野島に『大好き愛してる』って言われながら野島の腕と干したてのふわふわベッドシートと枕とに包まれて眠りながら死にたい。今こんなほっぺが痛くなるくらい寒くて、反町みたいな過疎化もいとこの駅の地下深くでは絶対に死にたくない。

とか、ずーっと考えている間にもずっと死んじゃうんじゃないかって思いながら、横浜駅について電車を降りた。いつもの癖でエレベーターのほうにふらーと歩いていたけど、エレベーターなんて怖くて使えないからエスカレーターに流れていく人の波に身を任せてみる。でも、こんな長いエスカレーターが急にガクンと急停止したら。

世の中、生きてるだけでもう奇跡にまみれた勝ち組だ。

幸せありがと神様大好き付き合ってたまではいかないけど。っていうか神様もこんな人間に告られても、お前めんどくさいから無理とか言いそうだけど。

結局、何が一番安全で、安心できて、本物で、保障されているのかわかんない。

改札に上がってきて、駅を行き交う人は別にネットとかお母さんみたいに普段から知らない人にも『被災地のひとが可哀そうだねウチらががんばらなきゃね』とか言わないじゃん。至って普通。なにそれ。ねえ神様どう思う？偽善ってこういうことなの？私もうわかんない疲れた。勉強する気も失せた。むかつてきたし、なんで私は死ぬかもしれないのに勉強しにわざわざ横浜のカフェ探しにいったって、帰れることが前提でおつかい頼まれてんの。ライン確保もクソもないものばっか買う予定でいるの。

やっってらんねー。世の中意味わかんねー。帰れるかわかんないけどもう帰る。家の中なら死なない気がする。

またさっきの逆方向のエスカレーターでホームに降りていった。踵を返すって言葉がぴったりなくなり、くるっときれいにUターンをした。そして方向を間違えないように、渋谷行である方を確認してまた列に並ぶ。またこれで電車っていうものすごいスピードで走るへびに轢かれる確率は増えたけど、でもずっと家から離れた横浜にいるよりかは家に一ミリでも近づいてしまった方がいい。また電車に乗ると、いつもより人の多い各停の優先席でひたすら『リオンリオンリオン』ってくり返し叫んでいる男の人がいた。周りの人はその男の人を、たまにものすごく哀れんだ目で見つめるかと思えば、人を人と思わないような、最低で自分が一番ブスになるまなざしを向ける。

あのね。電車通学を経験するとね、しかもそれに慣れきってくるとね、そういう人へ視線をも送らないで無関心を装うのが悲しいくらいに得意になっちゃうんだよね。

私はそのリオンという音だけを聴きながら、早く反町、東白楽、白楽、妙蓮寺と、ひとつひとつ丁寧に目的地に近づいていくのがゲームみたいだと感じていた。しかも反町から東白楽は地下から地上へ飛び出す。あの潰されて死なないで済む、と思う反面今度は線路から落ちて死ぬ、って怖くなる。結局何をしても、私が頭を強く打って死亡する確率は少なくなることはない。どの駅からも、たまたま野島が乗り込んで来たり車両移動したりもしてこなかった。

またあの菊名のドミノの列を見ながら、コンビニに寄る。飲み物の棚がもうすっかり商品の補充が追いついていない。いつも誰が買うのって思うーリトルペットボトルやお水がからっぽで、ジュースが少しだけ残っている。炭酸であればなんでもいいんだよね。メロンソーダであるのは暗黙の了解だったけど、仕方がないから売れ残りの食物繊維が入ってる栄養ドリンクみたいな味の炭酸飲料を二本手に取って、おかしコーナーに行く。ポテチがもう

一つもない。食べ物が買い占められていた。

別に私はやけになって他のスーパーまで寄っておかし買う必要なんてないか。でも家に食べ物は何にもない。これってもしかしたら既に生存競争に負けているのかもしれない。

一つ甘いガムと、まだ少し残っていたおつまみコーナーのイカの燻製を取って、これでもう胃を誤魔化しながら生き残ってやろう。むかつく。腹立つ。

お前ら駅では普通のくせにコンビニ買い込んでんじゃねーよ。

でも私にとっては今日も普通に、余計にTポイントだけが溜まっていくだけだった。動いたけど、どこにも動かないまま、私は元来た道をアリのようになどって戻っただけで、失ったものは千円札だけで手に入れたものは適当に食われるだけのさして興味も沸いていないおやつだけだった。背中のリュックの中で、筆箱の中のシャーペンがぶつかる音が鳴った。

(続)